

—— 2009年9月 ——

一 才 納 弁

はじめに

2008年度から採択された特別教育研究経費(政策課題対応経費)により、金沢大学人材育成目標検討WGの作業の一環として、2009年9月3日～16日、主に石川県内に本社をかまえて中国(さしあたり上海市・南京市)に工場・事務所などを設置している企業などを訪問した。今回の訪問の目的は、金沢大学国際学類の学生が1年後の2010年夏から海外でのインターンシップを行う受入先を開拓すること、また、海外進出している企業などがどのような人材を求めているのかを調査することであり、これと合わせて新生の国際学類を広く認知してもらう広報的役割も期待されていた。

訪問に先立って、石川県上海事務所の石川一哉氏と電子メールで頻繁に連絡を取り、北陸銀行、北国銀行、コマニー(格満林)株式会社、シンコール(新光楽)株式会社、一村産業株式会社、小松精練株式会社、iseya(伊勢屋)、ヤギコーポレーション株式会社などを紹介していただいた。ただし、このうち、ヤギコーポレーションは事前の本社との交渉で海外事務所に日本人社員を派遣させるつもりがないという理由から事実上門前払いをくらってしまった。

以下に紹介する企業などとは電子メールで事前に何度か打合せを行っていたが、実際に訪問した際にはご多忙中にもかかわらず、貴重な時間を割いていただきこちらの話を聞いていただき、また、いろいろなお話を聞かせていただいた。ここに改めて衷心より御礼を申し上げたい。

本稿では、まず石川県上海事務所から紹介し、ついで銀行や企業・工場・

販売店舗などについて紹介し、また、定例で開催されている研究会(石川県上海事務所が主催)にも参加することを許可されたので、それにも言及してみたい。そして、最後に大学院教育GPで協定を結んでいる上海師範大学と交換留学生制度や短期語学研修などについて行った意見交換の内容を簡単に記録した。

1. 石川県上海事務所

(上海市延安西路2201号上海国際貿易中心 3階JETRO上海事務所内)

聞き取り対象者：石川一哉

写真1. 上海国際貿易中心

(石川県経済交流部長)

- ・もともと民間企業で会計・経理の仕事をしていたが、石川県庁の公務員試験を受けて転職した。
- ・石川県上海事務所に派遣される前に、上海・北京・台北で合計約2年間中国語を勉強した。



- ・石川県庁商工労働部国際ビジネスサポートデスクから3年間の出張勤務という約束で派遣され、2009年9月現在、2年半が経過した。半年後の2010年4月に次の職員が来ることになっている。

写真2. JETRO上海事務所

- ・石川県庁の試験を受けて入庁しても、この部署に配属されるとは限らない。すなわち、希望を出すことはできるが、それが受け入れられるかどうかはわからないという。



- ・このような仕事をするには、中国語会話能力は絶対に必要であるが、さ

らに中国の歴史や文化などについても広く学んでおく必要がある。

- ・当該オフィスビル(国際貿易中心)には日系企業の事務所がかなり多いようである。多くの日本人社員を目にした。
- ・3年で駐在員が交代するので、せっかく築きあげた人脈を完全に引き継ぎすることができないのが問題だと感じる。
- ・石川県上海事務所(あくまで仮称であるという)は、JETRO上海事務所の一画を借りているにすぎない。各県の事務所も同様の形態で置かれているようであるという。よって、組織上はJETROとは何の関係もないが、情報交換は行っている。
- ・JETRO上海事務所でのインターンシップを希望するのであれば、日本の本部事務所に問い合わせる必要がある。数日後、JETRO上海事務所でのインターンシップ受入に関する問い合わせ先を教えていただいた。
- ・華東地域にある石川県の企業は大部分が製造工場であるが、日本人の大卒者に関しては経営・管理を担当する人材を必要としている。また、経理(会計や税金に関すること)や法律・法令に関することは中国人に任せるか、コンサルタント会社に委託している場合が多い。
- ・JETROの調査統計によると、日本人の海外居住者(長期滞在者)数では、2009年現在、上海がニューヨークを抜いて第1位となった。
- ・江蘇省政府などの地方政府の呼びかけに応じて会議に参加することがある。9月初頭にも揚州市で開催された会議に出張する予定だったが、折からの新型インフルエンザ流行のために参加を自粛することにした。このような会議では、日本企業に対して中国への投資が呼びかけられ、人脈作りの場となる。なお、最近では、西部大開発の一環として日本企業の中国内陸部への企業進出を呼びかけられている。
- ・華東地域の中国系企業の幹部には日本企業と比べて女性が多い。すなわち、女性が活躍する機会が多いように思われる。

II. 銀 行

(1) 北陸銀行上海駐在員事務所(上海国際貿易中心 6 階602室)

聞き取り対象者：中条宏志(所長・主席代表)

- ・1960年生まれで、最初に中国に来たのは1986年で、復旦大学に1年間留学して中国語を学んだ。
- ・2003年に駐在員として上海に赴任した。
- ・派遣日本人駐在員3人と現地採用中国人社員1人の体制で運営している。
- ・インターンシップの受入に関しては、本店(富山市)に問い合わせをしない
と回答できない。
- ・上海駐在事務所ではいわゆる銀行業務は行っていない。それは、中国政府が許可していないからである。
- ・北陸銀行は金沢大学と協定を結んでおり、2009年9月初頭のトレイニーで金沢大学の学生を世話した時にも学生に話したことだと前置きをした上で、学生には以下のことを望むという。すなわち、中国に来て中国社

写真3. 北陸銀行上海事務所



会の現状を見て格差について考えてほしい。そして、格差の大きい中国社会(とりわけその多様性)を理解してほしい。そのためにも、中国近現代史をもっと勉強するべきである。それは相互理解にもつながるはずである。さらに、世界で起こっていることにもっと関心を持ち、世界の事情を知るように努力する必要がある。世界のことを知るためにはやはりまず英語をしっかりと勉強し、コミュニケーション能力を向上させる必要がある。

- ・取引関係のある企業の動向について、近年、蘇州への進出企業が急増しており、さらに無錫への企業進出はあるが、常州になると少ない。
- ・「農民工」(農村部からの出稼ぎ労働者)の実態・動向に関して質問を受けた。

- ・ 今般の民主党政権の登場(巷間囁かれている明治維新に匹敵する変革)で日本経済が今後復活・発展することを期待している。
- ・ 取引関係のあるテラソー株式会社の工場(高級ソファ製造工場)を紹介していただいた。

(2) 北国銀行上海事務所(上海市南京西路1376号上海商城350室)

今回の中国訪問の前に、北国銀行本店の海外業務を管轄・担当する部署である国際部の倉内康博氏(国際部部長)と大江聡氏(支店支援部支店支援課課長代理)に研究室までおいでいただき、事前の打ち合わせを行った。北国銀行上海事務所でのインターンシップの受入も含めて金沢大学との連携を強化していく旨であることを確認した(金沢大学と北国銀行の間では2008年6月に「包括的連携協力協定」を締結している)。北国銀行海外駐在員事務所(シンガポール、上海)へ駐在員を派遣しているが、若い行員は上海へ派遣されることを忌避したがる傾向が見られる。

写真4. 上海商城



聞き取り対象者：筆安 史(国際部調査役補)

- ・ 海外駐在員の任期は2年半くらいとなっている。
- ・ 上海での住居は、北国銀行本店が借り上げているマンションとなっているので、自分で探す必要はない。
- ・ 北陸銀行に比べると、常駐社員が少なく(日本人駐在員1人と日本語が堪能な中国人社員2人)、せっかく築きあげた人脈を完全に引き継ぎすることができないのが問題だと感

写真5. 北国銀行上海駐在員事務所



じる。また、中国人社員の流動性が高く、長期的に勤務してくれる人材を確保するのが難しい。例えば、ようやく仕事にも慣れてきた頃に突然転職してしまうということがよくある。

- ・上海に派遣されてから民間の中国語学校で中国語を勉強し始めた。
- ・上海で仕事をする上では中国語(とりわけ会話能力)は必要だが、英語は特に必要とはしない。この点は北陸銀行の認識・考え方と異なっている。
- ・日本経済にとって中国経済の重要性は高まってきている。
- ・在上海日系企業での学生のインターンシップ受入の窓口として協力していきたい。この点については、本店とも確認済みである。また、2010年夏に北国銀行上海事務所に学生のインターンシップを受け入れることは可能である。
- ・華東地域にある日系企業は、現在、全体的な傾向として製造・輸出から中国国内向け販売へとシフトしつつある。
- ・祖父は南満州鉄道株式会社に勤務していた。その祖父が帰国後に戦後の日本の衛生状態の悪さを指摘していたのを印象深く覚えている。
- ・日本でも北国銀行と取引関係があるかつ美(ブライダル産業)の上海店を紹介していただいた。

Ⅲ. 製造・販売

(1) テラソー (上海市嘉定区馬陸鎮澄瀏中路1533号)

事前に連絡を取り合っていた長期駐在員(管理課課長)である村上敏彦氏とたまたま出張して来ていた望月正晴氏(海外事業統括室室長)・山崎清恵氏(海外事業統括室次長)・田中貢氏(総務部次長)の4人に応対していただいた。

聞き取り対象者：村上敏彦

- ・大学生の時、英語があまり得意ではなかったなので、中国語を習得しようと思って勉強した。
- ・1990年代後半に大学で中国語を学び、大学2年生の時に最初に上海に来た。

- ・仕事の上では中国語コミュニケーション能力が必要である。
- ・作業場を案内していただいた。労働者の多くは四川省など外地から来ており、現地の馬陸鎮出身者は少ない。基本的には能力給(出来高払い)で、若い労働者が多い。馬陸鎮の若者は上海や嘉定の市街地でより給料の高い仕事に従事している。内陸部から多数の若年労働者が流入してきているという事情から考えれば、より安い労働力を求めて工場をインフラが未整備な内陸部へ移転させる必要性は強くないことになる。また、当該工場は特に社員宿舎を所有していないというから、外来の労働者は近くの農家の1室を間借りしていると考えられる(詳細は、拙稿「華東農村訪問調査報告(2)－2008年9月、江蘇省・上海市の農村」(『金沢大学経済論集』第29巻第2号、2009年3月)を参照されたい)。
- ・商品のソファーは全て日本の家具販売会社を通して日本へ輸出している。そのため、品質の管理・検査とともに納期を守らせて作業をさせるのに最も気を使っている。

聞き取り対象者：山崎清恵

- ・金沢大学経済学部堀林ゼミのゼミ生だった。学部学生の時に中国語を勉強したことはなかったが、1988～89年に大連で、さらに1991年1年間台湾大学で中国語を学んだ。
- ・馬陸鎮は上海の「トルファン」と呼ばれており、葡萄の生産地として有名である。産地偽装問題が生じるほどのブランド品となっている。たしかに、今回、上海市街地の果物屋で馬陸産の葡萄をよく見かけた。
- ・今年の年末には、上海市街地から馬陸鎮を通して嘉定まで至る地下鉄が開通する見込みであるという。馬陸鎮一帯の農村がより一層急速に都市化することが予想される。

(2) 格満林・コマニー(南京市江寧区江寧科学園天元中路36号)

事前に連絡を取り合っていたのは村中敏昭氏(経営管理企画本部副本部長)だったが、当日の応対は総経理の沢田直樹氏が中心となり、村中氏と大森光紗氏(董事・副総経理、元台湾籍)が同席した。まず工場を案内してい

ただいた後、同社のプロモーションビデオを見て、南京工場の沿革などについて説明を受けた。

なお、今後の交渉の窓口役は村中敏昭氏がつとめるという。

聞き取り対象者：沢田直樹(董事・総経理)

- ・ 泉ヶ丘高校を卒業した後、1946年に金沢大学工学部に入学して、卒業後は欧米で勤務することが多かった。60歳になる。
- ・ 海外でパーティーや宴会は人脈作りの重要な場であるが、そのような場ではそれぞれの地域の文化・歴史や社会などを理解した上で会話することが信頼関係を構築する上で極めて重要である。すなわち、言葉(外国語会話能力)はもとより重要であるが、世界を知り、異なる文化や価値観を理解することが必要であるということになる。
- ・ 1996年に国際事業の立ち上げのために要請を受けてコマニーに入社し、1999年11月に南京工場の操業を開始した。事前に市場調査などを通して、南京、蘇州、上海にしぼり、最終的に南京に進出することになった。周囲あるいは日本の本社の中からは、南京の歴史的事情(日中戦争中に日本軍が南京大虐殺事件を引き起こしたこと)から、反対する声も多く聞かれたが、決断に至った最大の理由は、南京市政府との人脈があったからである。実は、副総経理の大森氏の父親は、1949年に国民党から共産党へ政権が交代した時、南京から香港を経由して台湾へ移住したが、改革開放路線が採用された後に南京に戻って、南京市政府幹部にかつての知り合いがいたことから、コマニーとの仲介役を買って出たという事情があった。
- ・ 日本人や日系企業とは一定の距離をおいて付き合うようにして、むしろ中国の企業と積極的に付き合って中国社会にとけ込むように努力している。
- ・ 求める人材像は、誠実さや礼儀正しさを備えている人間である。海外で活躍しようとするのであれば、英語能力を高めておくことは重要であるが、原理・原則を持ち続け、自分の信念・意見を持って話すことができるようにしておくことがより重要である。
- ・ 近年、星陵大学の学生が見学に来た時、いろいろと説明をしたが、あまり反応がよくなかった。ミスマッチ(こちらが提供した話題と星陵大学側

が求めているものとのズレ)があった。

- ・日本の本社を通さなくとも直接様々な交渉をすることが可能である。インターンシップ受入の可能性は高いと思われる。
- ・南京の工場には300人余りの社員がいるが、社員教育を徹底している。デザイン・設計などを担当する社員の多くは、理工系大卒者である。給与は能力給である。
- ・地下鉄1号線の延長工事が行われており、当該工場の近くにも地下鉄の駅がもうじき完成する予定である。なお、経済開発区となって工場などが林立する南京市江寧区には1年前にも訪れているが、江寧区はかつて江寧県と呼ばれ、農村地域だった(詳細は、拙稿「華東農村訪問調査報告(1)－2008年3月、江蘇省・上海市の農村」(『金沢大学経済論集』第29巻第1号, 2008年12月)・同「華東農村訪問調査報告(2)－2008年9月、江蘇省・上海市の農村」(『金沢大学経済論集』第29巻第2号, 2009年3月)を参照されたい)。
- ・南京市街地の中心地では、再開発が行われており、地下鉄の工事に加えてマンションやビルの建設が盛んで、街中が土埃に被われている。
- ・上海にも事務所(上海市延安西路2299号世貿商城1804室、格満林国際貿易有限公司)を持っているが、世貿商城はJETRO上海事務所のある上海商城に隣接するオフィスビルである。

(3) 一村産業上海事務所(上海国際貿易中心2707室)

聞き取り対象者：矢木猛(董事・総経理)

- ・早くから海外で働いてみたいという希望を抱いていて海外に対して強い関心・興味があった。インド、パングラディッシュ、中東、北欧での勤務経験がある。インド人との交渉は非常にタフなものだったという。
- ・商談などでは英語会話能力が必要である。特に、パーティーなどで

写真6. 一村産業上海事務所



人脈作りをするための会話能力が必要である。例えば、ジョークを言うなど。ただし、ブラックジョークはいけない(地域によっては大きな問題になる)。このためには、その国の文化などを理解しておく必要があるということになる。

- ・中国に来て6年目になるが、文化の差を感じる。中国人労働者の流動性が高く、技術を習得した頃に転職してしまう。
- ・インターンシップの受入に関しては本社マターであるので、本社と交渉してほしいとのことである。また、東レの関連企業(子会社?)なので、一村産業の仲介・紹介で東レの上海事務所でのインターンシップも可能ではないかとしているが、いずれにせよ、本社との交渉が必要であるという。
- ・小松精練上海事務所所長の越田耕作氏とは普段より親しくおり、よく知っている(繊維関連を扱う同業でもあるからであろう)というので、小松精練上海事務所まで連れて行っていただいた。

(4) 小松精練上海事務所 (上海国際貿易中心1913室)

聞き取り対象者：越田耕作

- ・中国での勤務も12年目になる。石川県に本社のある企業の中では上海駐在年数が最も長い。
- ・常駐日本人スタッフ2人、現地採用の中国人スタッフ3人の体制となっている。
- ・蘇州市甬直鎮に工場がある。その工場には、日本人スタッフが8人おり、労働者は約300人で、そのうち地元の甬直鎮出身者はほぼ半分の150人くらいである(その工場でも内陸部から労働者が流入しているのだろうか)。給与は900元以上で、能力給である。
- ・企業は即戦力を求めている。
- ・インターンシップの受入に関しては本社マターであるので、本社と交渉してほしいとのことである。

写真7. 小松精練上海事務所



(5) シンコール上海事務

写真8. 国旅大廈

(北京西路1277号国旅大廈1202-1203)

シンコール上海事務所があるオフィスビルの国旅大廈は北国銀行上海事務所から徒歩約5分のところにあるが、当該オフィスビルのエレベーターは偶数階行きと奇数階行きに分かれている(エレベーターの中に小さく表示されている)。また、



約束した時間に当該事務所を訪問すると、山越株式会社上海事務所(上海国際貿易中心1201室蝶理公司内)販売部部長の俞建鴻氏(上海出身で北陸大学に留学したという)が同席していた。シンコール上海事務所の豊川毅氏は元中国国籍であり、2人は頻繁に情報交換をしているという。

聞き取り対象者：豊川 毅

写真9. シンコール上海事務所

(上海事務所首席代表)

- ・大阪に留学していた。
- ・現在は、3人体制で、そのうち1人は現地採用の事務職である。
- ・日本の本社からの製品の輸入・販売業務を行っている。
- ・2年前に無錫市新区(経済開発区)に子会社のユニバー工場(カーテンの生産)を設立した。製品は全て日本に輸出している。
- ・求める人材は、中国語能力があり、ワード(マイクロソフト)などのパソコンソフトを使いこなせ、また、性格的には明るく、前向きで積極的な人間であるという。
- ・学歴よりも職歴(個人の能力)を重視している。すなわち、即戦力を求めている。



(6) iseya(上海市南京東路353号353広場4階466A)

アクセサリなどの小物の販売店舗であり(いわゆる歩行者天国通りに

ある), 人民広場に隣接する西藏中路268号来福士広場3階に分店がある。南京東路は上海の中でも最も賑やかで人通りの多いところである。ということから、店舗の家賃の値上がりを心配していた。

聞き取り対象者：伊勢利子(執行董事)

- ・10年間ほど英語で留学生支援のボランティアをした経験がある。
- ・2002～2003年、上海の交通大学に留学して中国語を学んだ。
- ・若い時は、とりあえず中国に来れば、中国語の日常会話くらいはすぐになれるのではないだろうか。
- ・上海では男女差別はないし、女性が活躍する場も多い。しかも、中国の企業のトップには若い人が多い。
- ・海外(例えば上海)で活躍するには、素直で明るい性格であることが重要で、積極性を重視している。
- ・インターンシップの受入は可能であり(上海店の経営は完全に任されているので、日本の本社と交渉する必要はない)、可能な限り全面的に協力・支援することを惜しまない。ただし、事前の準備として、中国人社員に対して金沢や自己紹介を含む金沢大学国際学類の紹介を中国語あるいは英語で行えるようにしておく(映像入りで)のがよいのではないかという提案があった。

IV. ブライダル産業

かつ美「薇拉宮邸」(上海市楊浦区営口路669号)

事前に連絡をとって 対応していた
だくことになっていたのが石晴磊氏(総
支配人。長い間、日本で暮らしていたの
で日本語は非常に堪能)だったが、当日、
たまたま本社専務取締役・営業統括担当
の中村卓也氏が出張してきていたので、
いろいろと話を聞くことができた。

写真10. 「薇拉宮邸」



また、石氏には総合結婚式場内を案内
していただいた。

写真11. 結婚式会場



聞き取り対象者：中村卓也

- ・日本にあるブライダル学校で非常勤講師も兼務しているが、学生の多くは上海(中国)に行きたがらない。
- ・地下鉄8号線黄興公園駅出口のすぐ脇の建物をまるごと借りている。ここが海外1号館である。かつて台湾の結婚式・披露宴を見て、華人社会の結婚式・披露宴に対する考え方が日本と近いと感じ、結婚人口の多い中国で事業を展開しようと考えていた。そして、小松・上海便就航を機に上海へ進出・出店することを決意した。場所の選定にあたっては、上海では新築するのは多くの点で困難を伴うので、上海市政府とねばり強く交渉して現在の場所を借りることになった。貸す側としても、賃料の確実な徴収という点から建物を分割して貸すよりも一括して貸す方がよいと判断したという。
- ・現在、上海店は、役員3人(そのトップが石氏)、日本人従業員3人(中国語練習中)、中国人従業員30人(そのうち半数は上海人)おり、上海人のお客さんは上海人(上海語)による接客(案内・説明や相談)を希望しているので、接客は上海人従業員に任せている。結婚式・披露宴は週末・休日の夕方・夜に行われるので、従業員の勤務時間は昼から夜9時頃までとなっている。繁忙期は10月で、ついで5月である。すでに2年後まで予約が入っている。例えば、2010年10月10日、2011年11月11日は人気が非常に高い。
- ・ブライダル産業は、日本では不景気の影響を受けているが、上海での営業成績は順調に推移している。
- ・インターンシップの受入は可能であるが、就業体験は掃除から始まることを覚悟してほしい。学生には何よりも積極性を求めている、未知の世界へ飛び込んでいこうという意気込みが必要である。なお、インターンシップにおいては、学生に実際の結婚式・披露宴を見てもらって感想を

書いてもらうのもよいかもしれないという提案があった。

V. 石川県中国ビジネス研究会

開催日時：2009年9月11日17：00～18：40

開催場所：上海国際貿易中心3階JETRO上海事務所内大会議室

報告内容：①「組織に役立つCS」(LINK-C河野隆)

②「最近の会計・税務トピックス」(上海マイツ董事長・公認会計士池田博義)

③「事態急変！上海市・外地人「城鎮保険」加入[義務化]問題を読み解く」(上海クイックマイツ小園英昭)

VI. 上海師範大学

交渉相手：劉民鋼(上海師範大学人文与伝播学院副院長・中文系教授)

・金沢大学国際学類からの短期語学研修生の受入については、以下のよう
に暫定的に取り決めた。

○時期：2010年3月5日(金)～14日(日)

○人数：10人(男女各偶数、宿舎が2人1部屋のため)

○飛行場までの送迎は別料金

○＜スケジュール＞

・月曜日～金曜日の午前中＝中国語の授業

・週2回、晩にアトラクション(学生との交流会、中国文化などに関する講演)

・週末に朱家角鎮を参観

・上海師範大学には費用のいかんによっては私費留学を希望する学生もいると考えられるという(現在、香港の大学へ留学する学生がいるので、その費用と同じ程度であれば、むしろ日本への留学を希望すると考えられる)。ただし、多くの学生は半年の留学を行っているので、2年間の留学を希望する学生がいるかどうかはわからない。

- ・ 学生の就職は厳しい状況が続いているが、両親は留学をさせる経済力はある。
- ・ 社会学系は女子学生の割合が高い。
- ・ 上海以外の世界に関心・興味を持っていない学生や就職しようとする意欲がない学生がいるのが悩みであるという。

おわりに

今回の中国訪問と交渉を通して最も強く感じたのは、1人でも多くの学生が短期語学研修(中国語学習)、海外生活体験、インターンシップ(就業体験)などの様々な形態で自分の目で海外(外の世界)を見てみるか、あるいはこれらをパッケージして体験してみるのもよいのではないかということである。

上海は戦前には東洋で最も国際的な都市だった(しばしば魔都とも呼ばれた)が、数十年の紆余曲折の時を経て現在再び世界のビジネスマンが集結して激しい競争を繰り広げる国際都市として復活してきた。上海を知らずして、あるいは上海を見ずして今後の世界経済は語ることができない時代が到来したと言っても決して過言ではない。

たしかに、上海は悠久の歴史を有する中国全体の中では1842年の開港以降発展が始まった新興地域であり、しばしば日本の横浜と類似しているとも指摘され、決して中国を代表しているわけではない。よって、上海を理解することが直ちに中国を理解することにはつながらない。

だが、今回お話を聞かせていただいたほとんどの方が、多くの学生に現実の上海を見てほしいと考えていた。それは、自らが感じてきた中国社会の活気・活力・熱気などを学生にも感じてほしいということであろう。

そして、今回の聞き取り調査でほぼ共通していたのは、第一に、日本社会よりも上海(中国)社会の方が、女性が活躍するチャンスが多く、実際、中国では女性の活躍が目立っていること、そして、第二に、企業側が学生に求めているのは、一定程度の学力は必要だが、学力よりも気力・意欲(進取の気性 a spirit of enterprise)であるということである。

今回訪問した日系企業の中でも多くの日本人女性が活躍しているが、非常

に生き生きとしていたのが印象的だった。金沢大学国際学類は女子学生数が多くの割合を占めているが、女子学生が海外で活躍する場として上海・南京などをはじめとする中国は魅力的なのではないだろうか。